

実戦的生命科学英語コミュニケーションプログラムより

統合生命科学専攻 細胞認識学分野 博士後期課程2年

水 野 苑 子

「実戦的生命科学英語コミュニケーションプログラム」によるご支援の下、2022年11月7-10日にフランス・ストラスブールで開催された第3回日仏合同発生生物学ミーティングに参加させていただきました。ミーティングには、発生生物学に関する約200名の研究者が世界中から集い、約130の口頭及びポスター発表が行われました。内容は実に多様かつユニークで、着目する現象もモデルとなる生物やシステムも多岐に渡っていました。自身の研究テーマである形態形成に関する発表も数多く拝聴でき、組織や器官の形が作られる仕組みを解き明かすために、力、形と遺伝子発現の相互作用、個々の細胞のふるまい、進化的保存性などなど、実に多様な切り口の研究がありました。第一線で活躍される研究者の柔軟な発想力、鋭い着眼点と観察力が生かされた新たな研究成果はどれも大変興味深く、勉強になるものでした。

私は、「マイクロペプチド遺伝子が上皮組織の変形を制御する分子メカニズム」についてポスター発表をさせていただきました。聞きに来てくださった皆様の専門分野が多様で、新鮮な視点からご助言をいただいた点が本ミーティングならではの大きな収穫でした。例えば、私自身は知識が未熟な力学をご専門とされる先生のご助言から、マイクロペプチド遺伝子を欠損した上皮組織の変形が異常になる表現型について新たな角度から捉える重要な視点を得ることができました。

なんといっても、初めて国際学会に参加した私にとって、国外研究者との交流は新鮮で嬉しい経験でした。特に印象深いのは、交流会で、私が発表内容に特に興味を抱いた米国の研究者の方と議論できたことです。その方は緊張気味の私にも気さくに接してくださり、会話の中で、私が以前に読んだ論文の著者と親しいご関係であることが判明したり、米国で開催される若手研究者向けプログラムを勧めていただいたりと、世界が広がったような気持ちで会話を楽しみました。その他にも数多くの実りある交流を経験でき、今後研究活動の場を国外へと広げて行くための重要な第一歩になったと実感しています。

最後になりますが、このような貴重な経験は、生命科学研究科のプログラムによるご支援のおかげです。準備から帰国後まで親切にサポートしてくださった研究科の皆様、丁寧な英語指導をしてくださったJames Hejna

教授、選考委員を務められた先生方に、この場を借りて心より感謝申し上げます。そして、日頃からご指導いただき、今回の発表の機会を与えてくださった近藤武史先生と上村匡先生に厚くお礼申し上げます。

